

オーギュスタン・ベルクにおける「通態性」-文学と翻訳研究への応用-

The notion of “trajectivity” in Augustin Berque’s thinking
– Its application possibilities in literary and traductology studies –

ジュリー・ブロック

Julie Brock

基盤科学系

Faculty of Sciences and Art

E-mail Address : brock@kit.ac.jp

（翻訳：横田悠矢 京都大学大学院博士後期課程（フランス語学フランス文学専攻））

（2018年5月31日原稿受理、2019年8月30日採用決定）

要約

本論では、オーギュスタン・ベルクの風土学的思想の要点をまとめ、どのようにその思想を文学および翻訳学研究に応用しようとするかを説明する。第一部では、「通態性」という概念が意味するものを明らかにする。ベルクはとくに、プラトンの「コーラ」という概念を用いて、西洋思想の源には、主体にも客体にも属することなく、両者を包括する空間の概念があるということを示している。

「通態性」とは、主体と客体、抽象的な世界と具体的な世界、環境と風景、個人と社会、そしてより一般的には「A」と「Aでないもの」を繋ぐことを可能にする動きである。ベルクによれば、この動きは「*en tant que*」（すなわち）という定式を用いて表せるのであり、また、自然環境が風景として目に映っている人自身の行為を「解釈」と呼ぶのだ。第二部では、文学の領域においては、この意味での「解釈者」の役割を読者が果たしており、その読者の目にはテキストが詩や小説として現れているという仮説を立てる。第三部では、翻訳者の働きに問題点を絞る。翻訳においては、翻訳者は「解釈者」の役割を果たしており、客体の側にあると同時に主体の側にもあり、読者の側にあると同時に著者の側にもあり、原文の側にあると同時に「翻訳」となる新しいテキストの側にもあるのだ。以上の議論により、文学および翻訳研究に風土学的な視座を提供したい。

キーワード

オーギュスタン・ベルク、風土学、通態性、コーラ

Summary :

Augustin Berque makes reference to Plato’s *khôra* when pointing out the idea of a space which does not belong either to the subject or to the object, but which contains both of them. He calls “trajectivity” the movement that allows the linking of subject and object, abstract world and concrete world, environment and landscape, individual and society, etc., and “interpretation” the act of awareness of the subject *in whose eyes the environment appears as landscape*. In the field of literature, this function

of interpreting is carried out by the reader *to whom a text appears as a work*, or through the translator who stands both on the side of the object and the subject, the reader and the author, the original and the translation.

Key words :

Augustin Berque, mésology, trajectivity, *chôra*

1. 通態性とはなにか

デカルトとともに、近代は実証的・唯物論的・人間主義的理論への道を拓く、「思惟」（主体）と「延長」（客体）の別を明確にし、現代における科学の進歩の基礎を築いた。オーギュスタン・ベルク¹はこの点を踏まえた上で、プラトン、アリストテレスに遡り、第三項排除の原則²が、西洋の思考の様式を特徴づける弁別（シニフィエとシニフィアン、内容と形式、精神と肉体等）の主な要因であることを示す。また、ベルクはプラトンの後期対話篇『ティマイオス』³における「コーラ」の概念を扱い、そこでは空間が同時に「跡」（「蠟に残された跡」を意味する *ekmageion*）⁴および「母体」（ベルクはこの語に、プラトンが用いる二つの概念「母」 *mêtêr* と「乳母」 *tithênê* を結びつける⁵）として捉えられる。

「コーラ」の概念がプラトン以来西洋で扱われることのなかった点を強調しつつ、ベルクは東洋思想を拠り所として、アリストテレス的ではない哲学原理を模索した。それはすなわち、相矛盾する仮説を認め、比喻を通して表れる哲学であり、また相反する力を結び合わせることができる哲学、主体と客体のつながりを打ち立て、世界の外面性と存在の内面性を一望に収めることができる哲学である。

ベルクは $\langle r = s/p \rangle$ と定式化される風土学の基本仮説を、世界を「述語」として捉える西田幾多郎の「述語的世界」に求めている⁶。ここで $\langle r \rangle$ は現実を、 $\langle s \rangle$ は主語（底にあるもの、基礎、土台といった、語源 $\langle \text{sub-ject} \rangle$ が持つ意味において解される）を、 $\langle p \rangle$ は述語をそれぞれ指し、また両者の間の「/」は「として」、「即」（ $\langle \text{en tant que} \rangle$, $\langle \text{als} \rangle$, $\langle \text{as} \rangle$ ）の意である。この定式によれば、世界の現実は「述語としての主語」、すなわち表に現れない世界の土台 $\langle s \rangle$ を目に見える風景、述語「として」捉えたもの $\langle p \rangle$ である。ベルクはさらに、日本語の構造を鑑み、これに「 $\langle i \rangle$ にとっての」という要素を加えており、 $\langle i \rangle$ は、その人にとって $\langle s \rangle$ が $\langle p \rangle$ として現れる、その人、すなわち解釈者を示している。

¹ オーギュスタン・ベルクは、著名な地理学者、哲学者、東洋学者であり、和辻哲郎や今西錦司といった日本の思想家をフランスに知らしめた翻訳家でもある。氏は、和辻をはじめとする日本の思想家たちとの対話を経て独自の「風土学」という概念を提示するに至った。

² アリストテレス由来の用語であり、以下の論理的法則を指す：あるものについて、その肯定と否定とがある場合、一方が真ならば他方は偽、他方が真ならば一方は偽であり、その両方のどちらでもない中間的第三者は認められない。

³ プラトン『ティマイオス／クリティオス』、岸見一郎訳、白澤社、2015年

⁴ *Ibid.*, p. 81 [50 c]、翻訳ではこの語は「型」と訳されるが、ベルクの解釈に従い、本稿では「跡」という訳語を用いる。

⁵ 「母」については、*Ibid.*, p. 82 [50 d]、「乳母」については、*Ibid.*, p. 87 [52 d] を参照のこと。

⁶ 西田幾多郎「一般者の自覚的体系」『西田幾多郎全集』第5巻、岩波書店、1930年

たしかに、ベルクが風景およびその歴史に関する概念を見出したのは中国の思想においてであるが、彼が自ら「風土学」と名づける哲学の主な構成要素は、むしろ日本の言語、思想、文学に求められる。まず言語的側面では、日本語の構造を掘りどころとし、発話者——ベルクが発話行為の場と呼ぶもの——が明らかになるのは、たとえそれが言外に留まるとしても、発話内容の構造的な形態を通じてであることを示す。この点について、ベルクは「Marie est triste」(マリは悲しい) という発話を例に挙げるが、このフランス語の発話内容は、日本語に翻訳した場合、「マリは悲しそうだ」というニュアンスを含まざるを得ない⁷。ベルクは、日本語では発話者の位置が言語のなかに構造的に含まれている点を指摘することによって、現実の原則を定義するための、解釈者「i」の役割を認めるに至ったのである。

日本語では、「悲しい」と言えるのは当人のみであり、また「悲しい」と発話する際には主語が曖昧であるため、「悲しい」雰囲気は状況全体を指し得る。ベルクは著書のなかで多くの俳句を引用し、文法的な主語が明示されておらず、それゆえ状況全体の気分を含む広い領域に解釈の余地が開かれる表現として参照している。

哲学的側面では、主に和辻哲郎(1889-1960)、西田幾多郎(1870-1945)、今西錦司(1902-1992)、山内得立(1890-1982)の思想家から想を得ている。

まずベルクは、和辻の主著『風土』のうちに⁸、ヤーコプ・フォン・ユクスキュル⁹との根本的な繋がりを見出す。ユクスキュルは、生物が機械論的に還元し得ない主体であることを示した、動物行動学、生物記号論の祖である。ベルクは、ハイデガーが1929-30年の講義を行うにあたり、ユクスキュルから着想の多くを得ている点に言及しつつ、和辻がユクスキュル、ハイデガーの思想の系譜に連なることを明らかにしている。ベルクはとりわけ、『風土』の第一文をしばしば引用するが、ここでは和辻が風土性を「人間存在の構造契機」として定義している¹⁰。ドイツ語「Strukturmoment」の訳語である「構造契機」は機械工学の概念を由来としており、これは等価の力が互いに逆方向に作用することで全体の運動を生じる「偶力」である。個人を構造的に、環境と結びつける現象は、風土学の中心的な要素を成すのだが、こうした「通態性」の性格を鑑みれば、人間もまた「通態的」な存在であると言える。

またベルクは西田幾多郎から、人間が分かち合う世界、つまり現実は「述語」であるという考え方を得ている。西洋思想は主体と客体との間に区別を設けるが、西田の思想を通じて、これは主題(何について語っているか)と述語(主題について何が語られるか)との関係へと形を変えることになる。

次いで自然主義者である今西錦司について、ベルクは人類学者アンドレ・ルロワ＝グーラン¹¹との類縁性を指摘する。ルロワ＝グーランにおいては、動物的身体が有する諸能力の、技術的・象徴的システムを通じた外在化と発展から人間という種が生じるに至り、また反対に、こうした社会的身体——あるいは「通態的」身体——が動物的身体に作用することで、人間化が達成された。ベル

⁷ ただし、マリの母親が「マリは悲しい」と述べる場合、あるいは作家が登場人物マリについて同様に記述する場合など、発話状況によっては、むしろマリへの同一化と言える場合が存在することも事実である。

⁸ 和辻哲郎『風土—人間学的考察』、岩波文庫、1979年(初出は1931年)。

⁹ ヤーコプ・フォン・ユクスキュル(1864-1944)、エストニア出身のドイツ生物学者、哲学者である。

¹⁰ 和辻哲郎は前掲書の「序言」で次のように述べている:「この書の目指すところは人間存在の構造契機としての風土性を明らかにすることである」。

¹¹ アンドレ・ルロワ＝グーラン(1911-1986)、フランス先史学者、社会文化人類学者である。

クによれば、ルロワ＝グーランはこのように、個人と社会、動物的身体と「通態的」身体を分節化する「構造契機」の本質そのものを定義したのである。同様の概念は、今西の定式化によれば、「環境の主体化、主体の環境化」と要約される¹²。

さらに、ベルクは山内の『ロゴスとレンマ』を引用し¹³、その翻訳も試みているが、山内への関心は、「A は非 A である」といった相矛盾する性質の排除という、思想の根幹に関わっている。共和国からの詩人追放説を唱えたという点では、プラトンも類似の排除の視座を採用していると言えるだろう。そこでは詩的な表現の可能性そのものが取り除かれる。ある事物を、あたかもそれが別様のものであるかのように定義することを可能にする、比喩やその他の象徴的なイメージが排除されるのである。そして、まさにそれゆえ、すでに指摘したようにベルクの考察において重要である「コーラ」の概念は、プラトンの思想におけるひとつの謎として残されているのだ。ベルクが東洋思想に基づきつつ解き明かそうとするのは、この謎に他ならないのである。

2. 風土学の文学への応用

ベルクの思想において——「r」は人間的「現実」、「s」は世界の土台としての「環境」、「p」は「s」が解釈された後の「風土」を指す——、「s」が表象するのは抽象的なもの、存在論的経験とは無関係の科学的所与であり、「p」が表すのは、植物の色彩や煌々たる月明り、雪の冷たさといった、具体的に捉えられるもののみが存在する生物の世界である。「s」と「p」の関係は、一方では前者に属する抽象的なものが、具現化する傾向を示すことから、また一方では後者に属するありふれた世界の事物が、根源的なものへと向かう傾向を示すことから生じる。「通態性」とはそれゆえ、「s」と「p」の間に生起する往復運動において成り立つ現象なのである。

この定式を文学研究に応用するため、「r」を詩的あるいは文学的現実、「s」を言語学的な観点から捉えたテキスト、すなわち印字され、潜在的にはあらゆる読者の目に同一の仕方で触れ得るテキスト、そして「p」をこの同一のテキストでありながら、読書行為を通じて、それぞれの読者に固有な経験へと変化した作品と呼ぶことにする。「s」が意味論的、文献学的、文化的、人類学的研究に適するのに対し、同一のテキストは、読書行為の進行に応じて、読者の精神面に影響を及ぼし、またそれゆえに付加価値を担うことになる。じっさい読書行為の際には、言語学的な所与は消失し、むしろそれが読者の意識に生み出す感覚や感情、感動が位置を占めるようになる。読者とテキストの間には、こうしてある種の相互作用が働き、そこから読者にとっては、いわば第二の現実で自らが生き得た経験の記憶が、そしてテキストにとっては、まさに文学的性質が生起する。あるテキストが「詩」や「小説」となるのは、そのテキストが読者の精神面に掻き立てる経験を通してなのである。

ベルクの思想において「i」、すなわち抽象的環境を具体的風土として解釈する存在が重要な点についてはすでに言及した。これを応用するならば、文学ではこの機能を、言語的な所与が詩として、小説として現れることになる読者、批評家、翻訳者、出版者など解釈者個人が担うことになるだろう。

¹² 今西錦司は1941年に刊行された『生物の世界』の中ですでにこの定式化を行なっている。

¹³ 山内得立『ロゴスとレンマ』、岩波書店、1974年

3. 風土学の翻訳学への応用

«i» の機能を満たすとは、テキストの意味を解読できることのみを指すのではない。作品の意味——あるいは、メジョニック¹⁴の用語によれば意味生成作用 « signifiante » ——を十分に把握するためには、読者がそこに何かを加えることが出来ねばならない。読者は自らの感受性、受容性、主観性の一部を書かれたものに投影してはじめて、読書行為を十全に実現することができるのである。このように、読者と文学作品を結び合った関係は、必然的に特異なものであることが確認される。

さて、読者が翻訳者でもある場合、テキストから意味や構成等を引き出すための分析を行わねばならない。また言語学的、文化的、歴史的、文献学的側面等における、テキストの関心や主眼をより深く理解するためには、豊かな知識を得る必要もある。しかしながら、分析を行い、知識を獲得しさえすれば、翻訳者として十分というわけではない。本来の意味における翻訳行為に至るためには、新しい形式を生み出すための作業が必要とされる。

分析的な読解の次元において、翻訳者はテキストの意味合いを客観的に眺める一方で、解釈の次元においては、自らに様々な作用を及ぼした一節を見出すために、テキストを検討する必要がある。自らの読書行為から感じられたものと、それを掻き立てた一節を視野に収めてはじめて、自分自身とテキストとの関係を明らかにすることができるのである。翻訳者は、原典の読解が自らに生み出した効果に等しい効果を、自分の読者にも与えられるような翻訳を行うにあたり、まずは自分自身において、客観的所与を内面化すると言える。

プラトンにおける「跡」と「母体」の比喩に戻るならば、翻訳者にとっての「跡」は、さながら狩人が、追っている獲物の足跡を調べるように、翻訳の対象となるテキストについての知識を深めるといふ分析の仕事に結びつけることができるだろう。原典に関するこうした分析の一方で、翻訳者の仕事は、来たるべき翻訳について思慮を巡らせることにもある。本稿の仮説によれば、「母体」のイメージは客観的な分析をもとに、新たなテキストを生み出す仕事に対応するだろう。この新たなテキストにおいて、翻訳作品の読者は、原典を構成している内容を読むことができるのみならず、起点テキストがその読者に対して及ぼす効果を、一定程度まで感じる事ができる。

言い換えれば、原典は、「跡」や「痕跡」と同じように分析に資するが、この痕跡そのものが、翻訳者となる読者の目には、来たるべき創造的な作品の萌芽を宿している度合いに応じて、「母体」として現れるのである。「跡」と「母体」の間の相違はそれゆえ、視座の問題である。つまり、研究者——言語学者、意味論研究者、文献学者——が、テキストによって構成された、本稿が「跡」とみなす研究対象に関心を寄せるのに対し、翻訳者の方はこの「跡」を通して、来るべき翻訳の萌芽を目指すのである。この萌芽は——たとえ目には見えないにせよ——存在し、そしてそれは、「跡」と結び合うことで「母体」を生み出す。換言すれば、「母体」は「跡」を包摂し、また「跡」に新たな価値を加えるのである。文芸評論家の伊藤整(1905-1969)、および文学理論家のマルク＝マチュー・ミュンシュの言葉を借りるならば、この価値は「生きているもの」の感情、イメージ、感覚と呼ぶことができる¹⁵。こうして「跡」と「母体」の概念は、プラトンの思想においてそうであったように、生成 « genesis » において捉えられるのである。

¹⁴ アンリ・メジョニック(1932-2009)、フランス言語理論家、エッセイスト、翻訳家および翻訳学研究者である。

¹⁵ マルク＝マチュー・ミュンシュ、『生の作用 芸術としての文学』、オノレ・シャンピオン出版、1984年、または、伊藤整、『小説の認識』、岩波文庫、2006年を参照。

要約すれば、「跡」としての文学に関わる視座は、形式と内容を客体化しようとする分析的な過程から生じ、この視座が、読書行為で感じられたものによって充実するときにはじめて、「母体」とみなすことができる。本稿で述べたように、読解と翻訳がひとつの創造的な活動から生起するとすれば、その創造性は、読書という行為に固有の内面化に由来する。すなわち主体化の一形態が読書において生起することで、読者は——あるいは翻訳者は——テキストの意味や発話を内面化することができるのである。相矛盾する二つの目標を結ぶ二重の運動、つまり一方でテキストを客体化し、他方で主体化する運動を通して、まさに「通態性」を構成する「偶力」の働きを認めることができるのである。